

第4部 まとめ

以上の調査結果をもとに、保護者・子どもの状況等を整理すると、以下のとおりである。

1. アンケート調査結果から

(1) 属性(回答者属性・ひとり親としての属性)

・ひとり親になった理由は、離婚が多数(85.4%)

回答者の世帯の種類は、ほとんどが母子世帯であった(92.8%、問 3-3)。ひとり親家庭になった理由は、8割以上が離婚となっている(85.4%、問 5)。

(2) 保護者の状況

ア 経済・就業状況

(ア) 仕事・収入状況等

・有職者が8割超。就労形態は、「嘱託・契約社員・パート・アルバイト」が過半数(57.4%)
・土曜勤務のある回答者が約6割、日曜・祝日勤務のある回答者が約4割
・仕事上の悩みは、「賃金が安い」が最も多い(48.7%)
・養育費の取決めをしている割合は4割未満、現に受給しているのは2割未満

回答者のうち、8割以上が仕事をしていた(86.0%、問 11)。就労形態は、「嘱託・契約社員・パート・アルバイト」が過半数を占め(57.4%、問 12)、「正社員・正規職員」は3割に満たない(29.2%、問 12)。

勤務条件は、週5日勤務が最も多かったが(69.9%、問 13-1)、週6日以上勤務している回答者、22時以降の深夜勤務が定期又は不定期にある回答者がそれぞれ1割以上いたほか(週6日以上勤務 12.5%、深夜勤務 14.1%、問 13-1,3)、土曜日勤務が定期又は不定期にある回答者が半数以上(59.9%、問 13-4)、日曜・祝日勤務が定期又は不定期にある回答者が4割近くいた(39.7%、問 13-5)。

有職者の悩みで最も多かった回答は、「賃金が安い」であった(48.7%、問 14)。

以上に対し、回答者の1割強は仕事をしていなかったが(13.5%、問 11)、その理由は、「自分の健康上の理由」が最も多い(44.9%、問 15)。

「離婚」を理由にひとり親になった回答者(問 5)が養育費の取決めをしている割合は、4割に満たず(36.5%、問 6-1)、現在受給している回答者は2割に満たなかった(17.5%、問 6-2)。

養育費や手当等を含む昨年1年間の手取りの総収入は、平均で230万円となっている(問 10)。

(イ) 暮らし向き・負担感等

・現在の暮らし向きは、「大変苦しい」「やや苦しい」が約8割
・育児費・教育費、住宅費の負担が重い

現在の暮らし向きは、「大変苦しい」「やや苦しい」と評価する回答者が合わせて8割近く(79.6%、問 17-1)、特に、「育児費・教育費」(51.2%)、「住宅費」(45.5%)の負担が重い(問

17-2)。

教育費は、子どもが大きくなるほど高くなる傾向にある(巻末資料図表 115)。1か月の住宅費は5万円以上8万円未満の回答者が最も多くなっている(41.6%、問 9-2)。

養育費を「受けたことがない」回答者は、「現在受けている」、「受けたことがある」に比べ、現在の暮らし向きを「大変苦しい」、「やや苦しい」と評価する割合が高い(問 6-2×問 17-1。巻末資料図表 91)。

イ 生活状況

(7) 社会とのつながり

・約7割の回答者が「近所との付き合い」、「地域への行事への参加」が希薄

7割前後の回答者が「親戚・親族との付き合い」(70.3%)、「友人・知人、職場の同僚との付き合い」(67.8%)を、「よくしている」又は「たまにしている」(問 20-1,2)。

これに対し、7割前後の回答者が「近所との付き合い」(70.5%)・「地域の行事への参加」(67.7%)を「まったくしていない」又は「あまりしていない」(問 20-3,6)。

乳幼児の子どもが病気のときの対応(問 30)は、「自分が仕事を休む」が8割以上を占める(81.3%)。

これに対し、自分(回答者)が病気等で子どもの世話ができないときの対応(問 31)は、「親族に頼む」が最も多いものの(62.5%)、3割近くを占める「その他」の回答(28.8%)の大半は「自分で何とかする」であり、「子どもだけで何とかしてもらおう」も1割以上を占めている(12.5%)。

子ども・回答者のどちらが病気等であっても、家庭内で対応しようとする傾向性がうかがえる。

(4) 悩み

・子どもの教育・生活習慣、時間不足に関する悩みが多い

・約2割の回答者は、悩みを相談できる相手がいない又は必要ない

子育てに関する悩み(問 23)は、「子どもの教育費」(56.2%)、「子どもの進学・受験」(55.1%)、「子どもの勉強習慣」(46.8%)等、費用面を含む子どもの教育に関する悩みが最も多い。「子どもの生活習慣」(33.6%)がこれに次ぐが、「子どもと過ごす時間不足」(28.7%)、「子育てにあてる時間・余裕がない」(22.0%)、「家事にあてる時間・余裕がない」(24.5%)と時間不足に関する悩みも多い。

8割近くが悩みを相談できる人がおり(77.4%、問 25)、その相談相手は「友人・知人」(73.0%)・「親戚・親族」(67.3%)が多くなっている(問 25×問 26。巻末資料図表 117)。

一方、約2割の回答者が、悩みを相談できる相手がいない又は必要ない(19.0%、問 25)。

(7) 子どもと過ごす時間

・約3割の回答者が、平日に子どもと過ごす時間が1時間未満

平日に子どもと一緒に過ごす時間(問 21)は、1時間から3時間の間で5割近くに達するが(49.6%)、1時間未満も3割近い(27.6%)。

(3) 子どもの状況

ア 生活状況

(7) 社会とのつながり

- ・約7割の回答者が、子どもの「近所の人との付き合い」は希薄と評価
- ・子どもが「ボランティア活動等の社会的活動への参加」をしていないと評価する回答者は、8割超

子どもが「友人・知人との付き合い」を「よくしている」又は「たまにしている」と評価する回答者は8割を超え(85.2%、問 32-2)、子どもが「親戚・親族との付き合い」を「よくしている」又は「たまにしている」と評価する回答者は7割近い(69.4%、問 32-1)。

これに対し、子どもが、「近所の人との付き合い」を「あまりしていない」又は「まったくしていない」と評価する回答者は7割近く(67.8%、問 32-3)、「ボランティア活動等の社会的活動への参加」を「あまりしていない」又は「まったくしていない」と評価する回答者は8割を超えている(83.8%、問 32-5)。

(4) 生活習慣等

- ・子どもが「物事に失敗してもあきらめずに取り組んでいる」と評価する回答者は、7割未満
- ・子どもが「本を読んでいる」と評価する回答者は、約5割
- ・平日に子どもと過ごす時間が3時間以上の回答者の子どもは、3時間未満と比較して「物事に失敗してもあきらめずに取り組んでいる」割合が高い
- ・「近所の人との付き合い」「ボランティア活動等の社会的活動への参加」をしている子どもは、していない子どもと比較して「物事に失敗してもあきらめずに取り組んでいる」割合が高い

過去1か月間に、子どもが「決まった時間に寝起きしている」「朝食を毎日食べている」「まわりの人にあいさつする」「家庭で決めたルールや公共のマナーを守る」ことを「よくしている」又は「たまにしている」と評価する回答者は、それぞれ8割を超え、「あまりしていない」又は「まったくしていない」と評価する回答者はそれぞれ1割前後となっている(問 33-1,2,3,4)。

これに対し、過去1か月間に、子どもが「物事に失敗してもあきらめずに取り組んでいる」かについて「よくしている」又は「たまにしている」と評価する回答者は7割に満たず(69.7%)、「あまりしていない」又は「まったくしていない」と評価する回答者は4人に1人近くに達している(24.7%、問 33-5)。

また、過去1か月間に、子どもが「本を読んでいる」かについて「よくしている」又は「たまにしている」子どもは約5割(50.7%)で、「あまりしていない」又は「まったくしていない」子どもは4割超に達している(43.5%、問 33-6)。

平日に子どもと一緒に過ごす時間が3時間以上である回答者の子ども、「近所の人との付き合い」や「ボランティア活動等の社会的活動への参加」を「よくしている」又は「たまにしている」子どもは、そうでない子どもと比べて「物事に失敗してもあきらめずに取り組んでいる」ことを「よくしている」又は「たまにしている」割合が高い(問 33-5×問 21,問 32-3,5。巻末資料図表 102~104)。

(ウ) 放課後等の生活

・子どもが放課後に過ごす場所は、小学生は「学校(クラブ活動、あいキッズなど)」が最も多く(62.4%)、中学生以上は「自宅」が最も多い(76.5%)

子どもが放課後に過ごす場所(問 41)は、「自宅」が最も多く(65.8%)、「学校」(43.8%)、「塾・習い事」(32.2%)がこれに続く。

これを年齢層別に分類すると、小学生では「学校(クラブ活動、あいキッズなど)」が最も多く(62.4%)、「自宅」がこれに次ぐ(54.8%)のに対し、中学生以上の就学者では「自宅」が最も多い(中学生 76.5%、中学校卒業後就学中 70.1%)(問 8×問 41。巻末資料図表 116)。

イ 教育状況

・勉強が「あまり理解できていない」「理解できていない」と評価する回答者が約4人に1人
・成績が「やや下の方」「下の方」と評価する回答者が3割超
・「物事に失敗してもあきらめずに取り組んでいる」子ども・「本を読んでいる」子どもほど、勉強時間が長く、学習の理解度や成績も良好な傾向

子どもの学習の理解度(問 36)は、「理解できている」又は「まあまあ理解できている」割合が6割を超えているが(64.8%)、「あまり理解できていない」「理解できていない」割合が3割近くに達している(26.7%)。

また、子どもの成績(問 37)は、「上の方」「やや上の方」「真ん中あたり」の割合が6割超となっているが(61.9%)、「やや下の方」「下の方」の割合が3割を超えている(30.6%)。

過去1か月間に、「物事に失敗してもあきらめずに取り組んでいる」ことを「よくしている」又は「たまにしている」子ども(問 33-5)は、「あまりしていない」又は「まったくしていない」子どもと比較して、平日の勉強時間(問 35)が長く、学習の理解状況(問 36)や成績(問 37)が良好な傾向がある(問 33-5×問 35～37。巻末資料図表 112～114)。

同様に、過去1か月間に、「本を読んでいる」ことを「よくしている」又は「たまにしている」子ども(問 33-6)は、「あまりしていない」又は「まったくしていない」子どもと比較して、平日の勉強時間(問 35)が長く、学習の理解状況(問 36)や成績(問 37)が良好な傾向がある(問 33-6×問 35～37。巻末資料図表 109～111)。

回答者が子どもに希望する進学(問 39-1)は、「大学卒業」が最も多く(60.5%)、「高等学校卒業」「専門学校卒業」がこれに次ぐが(それぞれ 13.5%)、現実的な進学は、「大学卒業」が 24.3%と希望よりも割合が半減し、代わって「高等学校卒業」が 27.0%と希望から割合が倍増している。

現実的な進学の回答理由(問 40)は、「家庭に経済的な余裕がないから」が最も多い(33.2%)。

(4) 必要と思う支援等、制度の認知状況

ア 必要だと思う支援、知りたい情報

・必要だと思う支援は、就学費用の軽減、休日・夜間対応窓口の開設、就職・転職支援など、回答者の生活費用の負担の重さ、多忙、仕事上の悩みが反映
・知りたい情報は、公的助成や教育に関するものが多い

必要だと思う支援(問 44)は、回答者が「育児費・教育費」・「住宅費」の負担が重いと感じていること(問 17-2)を反映して、「子どもの就学にかかる費用の軽減を受けられること」(75.8%)、「住宅探しや住宅費軽減のために支援を受けられること」(52.1%)の割合が高い。

次いで、回答者の多くが有職者(問 11)で日中多忙であることを反映して、「休日や夜間でも

対応している相談窓口があること」(43.3%)、「子どもの居場所を提供してくれること」(32.0%)などの割合が高く、「賃金が安い」などの仕事上の悩み(問 14)を反映した「就職・転職に関する支援を受けられること」(29.2%)が続く。

知りたい情報(問 45)は、「子育ての手当てや公的助成について」が最も高く(51.2%)、次いで、子育てに関する悩みとして子どもの勉強・進学に関する悩みが多いこと(問 23)を反映して「子どもの進学や進路について」(50.4%)、「習い事や学習塾について」(32.2%)、「子どものしつけや勉強について」(30.6%)が続く。

イ 制度の認知状況

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 認知度が半分を超えた事業は 29 事業中 5 事業・ 悩みや知りたい情報に対応する事業の認知度が低い |
|---|

子育て家庭への支援策として例示した 29 事業のうち、認知度が半数を超えた事業(問 27)は、「ハローワーク」(86.5%)、「生活保護制度」(80.2%)、「ひとり親家庭等医療費助成制度」(76.3%)、「あいキッズ」(69.4%)、「就学援助制度」(66.9%)の 5 事業であった。

必要だと思う支援等が「就職・転職に関する支援を受けられること」である回答者(29.2%、問 44)が「マザーズハローワーク」を「知っている」又は「利用したことがある」割合は 4 割に届かず(34.9%、問 27・3×問 44。巻末資料図表 118)、子育てに関する悩みが「子どもの進学・受験」(55.1%、問 23)、「子どもの勉強習慣」(46.8%、問 23)である回答者が「学習支援事業「まなぶーす」や「まなぼーと(成増・大原)の中高生勉強会」を「知っている」又は「利用したことがある」割合は 1 割前後となっているなど(問 23×問 27・21,22。巻末資料図表 119・120)、回答者の悩みや知りたい情報に対応する事業の認知度が低い。

2. ヒアリング調査結果から

(1) 保護者・子どもの状況

保護者については、経済的困窮だけでなく、病気や障がいなどの複合的課題を抱えていることがあるとの話が聞かれた。また、保護者自身はその親から子育てに必要な伝承を受けておらず子育ての仕方が分からない、保護者に困りごとを抱えているという認識がない旨の話も聞かれた。

子どもについては、病気や障がいなどの困難を抱えていることがあるとの話が聞かれたほか、保護者から必要な生活習慣を教えられていない・朝起きられないなど生活習慣に乱れがある、成功体験が少なく、自信がない、学習習慣が身に付いていないといった旨の話が聞かれた。

(2) 支援の現状

多くの関係機関で、子どもとの信頼関係の構築を通じて子どもの生活習慣をただしたり、意欲・自信を持たせたりするほか、体験活動や交流活動を積極的に行って子どもの多様な能力を引き出す活動等を行っている旨の話が聞かれ、保護者の子育てを補完し、子どもの総合的な人間性を育もうとしている様子が見えてきた。

また、子どもに対する取組みだけでなく、子育ての伝承を受けていないなどの事情を抱えた保護者に対する目配りも重要である旨の話も多く聞かれた。

(3) 課題等

要保護児童対策地域協議会など、既に連携体制が構築され、運用実績のあるものについては、概ね良好な連携がなされている旨の話が聞かれる一方、子ども食堂や学習支援団体等からは、行政も含めた連携や情報発信で課題がある旨の指摘があった。

また、親から子どもへと伝承される「学び」を家庭教育任せにせず、社会でも補完していく必要がある旨の話も聞かれた。

